

第5章 大学生の意識

大学生の社会観と就労観

山田剛史

保護者との関係

杉谷祐美子

序章 大学生調査の実施とその活用に向けて

第1章 大学入学までの実態

第2章 大学生活について

第3章 大学での学習

第4章 大学卒業後の進路

▶ 第5章 大学生の意識

資料編 調査票見本、基礎集計表

大学生の社会観と就労観

大学生がどのような社会観・就労観あるいは自己認識を持っているのかをたずねたところ、現在の日本社会は「競争が激しいうえに努力しても報われるとは限らない」という厳しい現状認識を持っていること、「授業に限らず大学で学んだことは、将来役に立つ」と認識していること、自分自身をあまり積極的ではないと判断していることなどが見出された。

Q

あなたは次のようなことについてどう思いますか。それぞれについて、あてはまるものの1つをお選びください。

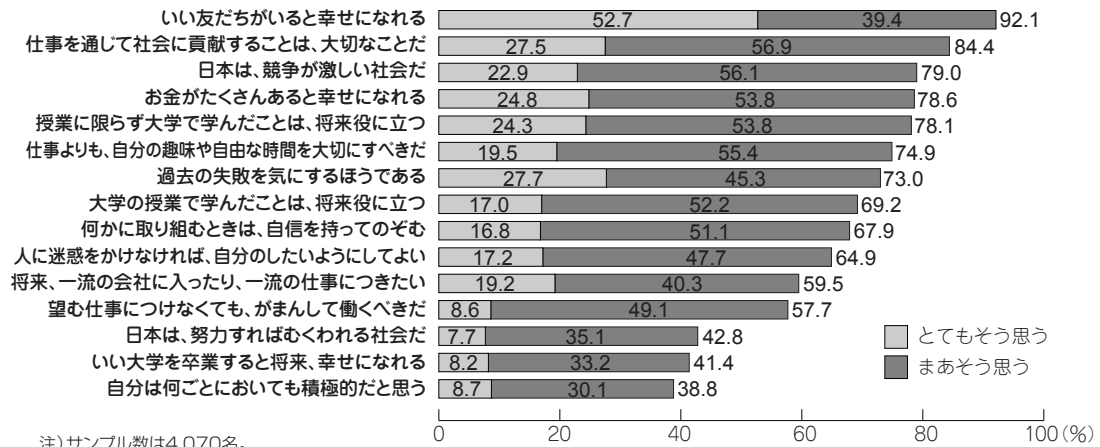
現在の大学生は、どのような社会観や就労観、自己認識を抱いているのか。図5-1-1によると、全15項目で上位の3項目をみると、「いい友だちがいると幸せになれる」(92.1%、「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%、以下同)、「仕事を通じて社会に貢献することは、大切なことだ」(84.4%)、「日本は、競争が激しい社会だ」(79.0%)となっている。また、下位の3項目は「日本は、努力すればむくわれる社会だ」(42.8%)、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」(41.4%)、「自分は何ごとにおいても積極的だと思う」(38.8%)となっている。こうした結果から大学生の意識をまとめると、第1に、現代の大学生には、現在の日本社会は競争が激しいうえに努力しても報われるとは限らないという、刹那主義にも収まりきれない厳しい現状認識があることが垣間みえる。第2に、学生は授業で学んだこと(69.2%)よりも授業に限らず大学で学んだこと(78.1%)のほうが将来役に立つという認識を持っている。第3に、学生は自分自身をあまり積極的ではないと判断している。

また、表5-1-1で性別による違いを検討したところ、全15項目中5つの項目で男女間に5ポイント以上の差がみられた(「とてもそう思う」のみの%)。男子のほうが高かった項目は、「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」(男子21.2%>女子16.2%、5.0ポイント差、以下同)、「仕事よりも、自分の趣味や自由な時間を大切にすべきだ」(21.9%>15.9%、6.0

ポイント差)、「人に迷惑をかけなければ、自分のしたいようにしてよい」(20.0%>13.1%、6.9ポイント差)の3項目であった。女子のほうが高かった項目は、「いい友だちがいると幸せになれる」(女子59.7%>男子48.1%、11.6ポイント差、以下同)、「授業に限らず大学で学んだことは、将来役に立つ」(28.0%>21.9%、6.1ポイント差)の2項目であった。男子については、達成動機が高く、その一方自分の私的時間を重要視している傾向、そして女子については、親和動機が高く、大学での学びを有効なものとしてとらえている傾向がうかがわれた。

次に、社会観に関して学校段階別に比較してみるとどのような違いがみられるのかについて検討を行う。図5-1-2は、2006年に調査した「第4回学習基本調査」(詳細は図5-1-2の注釈を参照)の結果と比較したものである。一貫して高い値を示しているのは「いい友だちがいると幸せになれる」で、すべての学校段階で「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると9割を超えている。小学校から中・高・大と段階を追うごとに高くなっているのは「日本は、競争が激しい社会だ」(小54.3%<中65.4%<高75.8%<大79.0%、以下同)と「お金がたくさんあると幸せになれる」(46.1%<56.0%<62.7%<78.6%)であった。逆に、小学校から段階を追うごとに低くなっているのは「日本は、努力すればむくわれる社会だ」(68.5%>54.3%>45.4%>42.8%)であった。

図5-1-1 大学生の社会観・就労観（全体）



注) サンプル数は4,070名。

表5-1-1 大学生の社会観・就労観（性別）

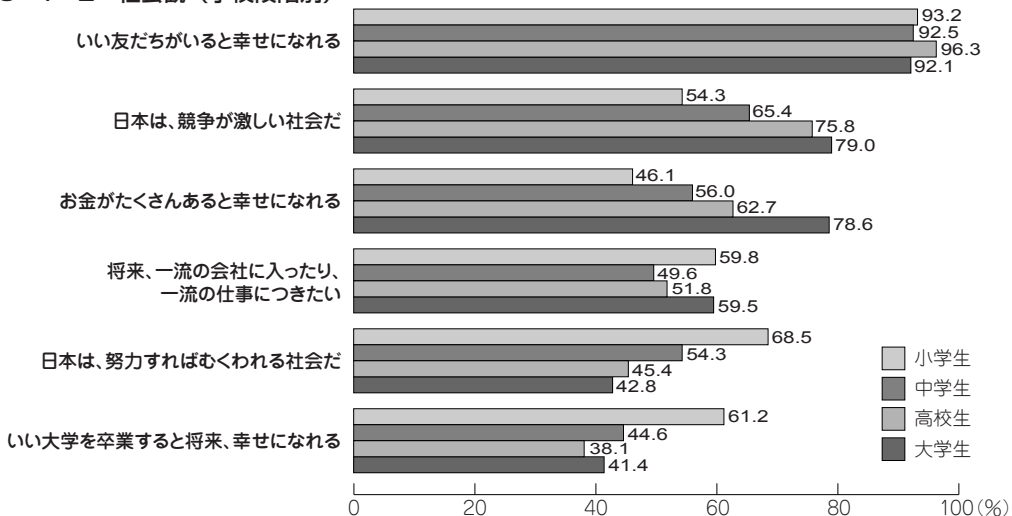
	男子 (2,439)	女子 (1,631)
いい友だちがいると幸せになれる	48.1	59.7
仕事を通して社会に貢献することは、大切なことだ	26.5	28.9
過去の失敗を気にするほどである	27.3	28.2
授業に限らず大学で学んだことは、将来役に立つ	21.9	28.0
お金がたくさんあると幸せになれる	25.7	23.5
日本は、競争が激しい社会だ	23.2	22.3
大学の授業で学んだことは、将来役に立つ	16.0	18.5
将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい	21.2	16.2
仕事よりも、自分の趣味や自由な時間を大切にすべきだ	21.9	15.9
何かに取り組むときは、自信を持ってのぞむ	17.9	15.2
人に迷惑をかけなければ、自分のしたいようにしてよい	20.0	13.1
自分は何ごとにおいても積極的だと思う	8.0	9.9
望む仕事につけなくても、がまんして働くべきだ	9.7	6.8
いい大学を卒業すると将来、幸せになれる	9.4	6.3
日本は、努力すればむくわれる社会だ	8.9	6.0

注1) 「とてもそう思う」の%。

注2) < >は5ポイント以上、<< >>は10ポイント以上の差があるものを示す。

注3) ()内はサンプル数。

図5-1-2 社会観（学校段階別）



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 学校段階別の小学生・中学生・高校生は、ベネッセ教育研究開発センター「第4回学習基本調査・国内調査報告書」（2007年）より引用。

注3) サンプル数はそれぞれ小学5年生2,726名、中学2年生2,371名、高校2年生4,464名、大学1～4年生4,070名。

保護者との関係

約6割の大学生が、なにごと自分で決めることが多く、困ったことは自分で解決すると回答したが、約4割の大学生は、保護者のアドバイスに従うことが多く、困ったときには保護者が助けてくれると回答した。

Q

あなたと保護者との関係について、それぞれについてもっとも近いもの1つをお選びください。

現在の大学生と保護者との関係はどのようになっているのであろうか。大学生になってまで、保護者との関係についてたずねるのは一見奇異な印象を与えるかもしれない。しかしながら、大学生にとって保護者の存在が以前よりも大きくなっていることは確かであろう。各大学において教育方針や学生の学修状況への理解を深めてもらうために、在学生の保護者との懇談会をしばしば開催することはもはや珍しくない。オープンキャンパスともなれば、保護者同伴で来場する高校生が多く、体験授業や個別相談会にも積極的に参加する保護者の姿がみられる。こうしたことから考えると、大学生の意識を明らかにするにあたって、保護者の存在や保護者とのかかわり方を無視することはできない。

それでは、回答結果をみてみよう。図5-1-3は、2つの対立する選択肢から自分の状況に近いものを選んでもらった結果である。3問ともどちらか一方の選択肢に極端に偏るわけではなく、およそ4:6の割合で二分している。いずれの設問も、Aは保護者への依存度を、Bは学生の自立度を示す選択肢を設定した。まず、意思決定の面については、「B:なにごと自分で決めることが多い」(59.9%、「B」+「どちらか」というとBに近い)の%、以下同) > 「A:保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」(40.1%、「A」+「どちらか」というとAに近い)の%、以下同)と、自分で決定する学生のほうが多い結果となった。次に、問題解決にあたっては、「B:困ったことがあると、自分で解決する」(58.2%) > 「A:困ったことがあると、保護

者が助けてくれる」(41.8%)と、意思決定とほぼ同様の比率で自分で解決するほうを選ぶ結果となった。これに対して、金銭面では、AとBの回答比率が逆転し、「A:お金が必要になったら、保護者が援助してくれる」(58.8%) > 「B:お金が必要になったら、アルバイトなどをして自分で準備する」(41.2%)となった。このうち、「A:お金が必要になったら、保護者が援助してくれる」で「A」を選んでいる学生は13.9%で、3つの設問のなかで「A」の回答の比率が最も高くなった。全体としては、どちらかという自分自身で意思決定し問題解決するが、金銭面では保護者に頼る傾向がみられた。ただし、その割合は6割程度にとどまることが示された。

こうした結果については、特に性別による差異がみられ、女子のほうが男子よりも保護者の支援を受けている状況が明らかになった(図5-1-4)。Aに該当する比率(「A」+「どちらか」というとAに近い)の%は、「A:保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」(「女子」46.7% > 「男子」35.6%、11.1ポイント差、以下同)、「A:困ったことがあると、保護者が助けてくれる」(48.3% > 37.5%、10.8ポイント差)、「A:お金が必要になったら、保護者が援助してくれる」(61.7% > 56.9%、4.8ポイント差)となった。金銭面では差異は小さいものの、それ以外では10ポイントを超える差となった。

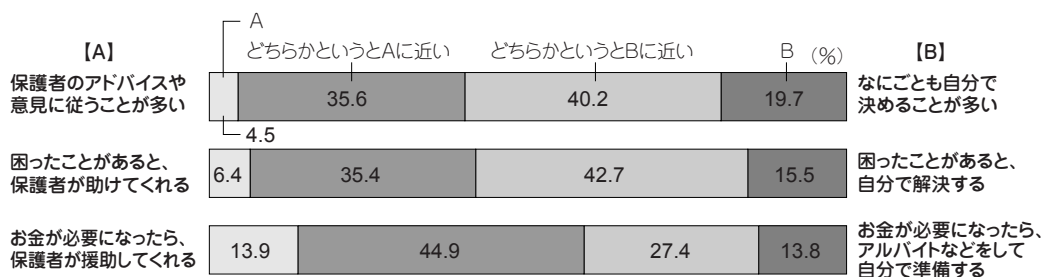
また、学部系統別では、「保健その他」で保護者からの支援を受ける比率がやや高く、「農水産」でやや低い結果となった。全体と比べて5ポイント以上差のついた項目は、「A:保護者の

アドバイスや意見に従うことが多い」（「保健その他」48.4%＞「全体」40.1%＞「農水産」32.8%）、「A：困ったことがあると、保護者が助けてくれる」（「全体」41.8%＞「農水産」34.4%）、「A：お金が必要になったら、保護者が援助してくれる」（「保健その他」68.5%＞「全体」58.8%）であった（巻末の基礎集計表参照）。

しかし、この結果に関しては、学年の違いによってほとんど目立った違いはみられなかった。このことは、学年の進行にともなって保護者と

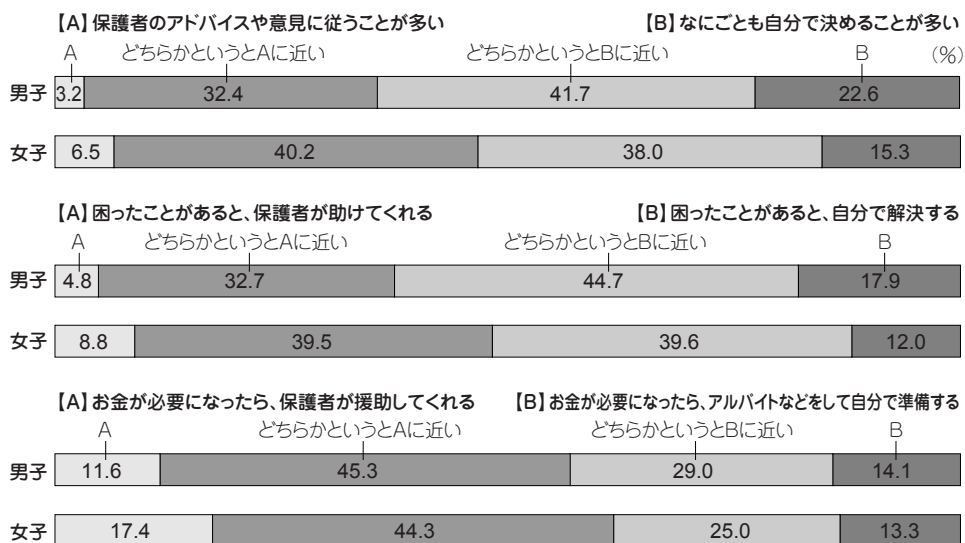
の関係に変化が生じる可能性が低いことを意味していると考えられる。もちろんどの学年でも、4割程度が「A：保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」「A：困ったことがあると、保護者が助けてくれる」と回答した結果から、現代の大学生が保護者への依存心が強く「大学生」として自立性に欠けると結論づけるのは早計であるものの、少なくとも大学生の親子関係が密接である様子はいかがえる。

図5-1-3 保護者との関係（全体）



注) サンプル数は4,070名。

図5-1-4 保護者との関係（性別）



注) サンプル数は男子2,439名、女子1,631名。